



今号の内容



P1 ・コミュニティケアの拠点の未来像
・COCコラボ教育ピックアップ

P2 ～ 3 COCフォーラム
・地域の顔
(第6回COC運営会議録から)
・地域づくり・健康づくり
(NPO法人コミュニティかりば
専務理事 佐野正明さん)
・コラボ教育での学び
(看護学ゼミナール)
・COC研究ひろば 第10回
(地域連携教育・研究センター
運営委員長 石原逸子)

P4 活動の思い出
COC事務局からひとこと

市看×いちかん ちいき通信

2018年春・最終号

2018年3月10日 発行

いちかん…神戸市看護大学の略称「市看」
「(い)っしょに (ち)いきづくりについて (かん)がえる」をコンセプトにしています。

コミュニティケアの拠点の未来像

神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター 准教授 相原洋子

健康日本21というのをご存知でしょうか。国民の健康づくり運動のための基本方針として、昭和53年から策定されており、現在の「健康日本21(第2次)」は第4次となります。この健康日本21は細かい目標項目を定め、それが達成できたか出来ないかを分かりやすく示しています。例えば「健康を支え、守るための社会環境の整備」については、「健康づくりを目的とした活動に主体的に関わっている国民の割合が、2022年度までに25%になる」と具体的な数値目標を掲げ、10年後どのような姿になれば、健康づくりが進んだといえるかを見ているのです。さて、COC事業でも取り組みの評価を行なうにあたり、学生、住民、教員を対象としたアンケート結果をもとに、割合の変化など毎年数字にとらめっこしていました。しかし数字はあくまでアウトプットであり、「全卒業生が地域住民の暮らしを理解でき

ようになる」というCOC事業全体のアウトカムが見えませんでした。外部の評価委員からもアウトカムの見えにくさの指摘をいただきながら、評価の見える化は事業担当をして最も苦心してきたことです。「地域住民の暮らしを理解し、看護実践に役立つようになるのは、実際には卒業してからがスタートだし」と自分に言い訳をしつつ、COC事業科目を受けた学生の皆さんが、卒後いつか地域で学んだことが役立ったと思い出してくれればいいなと思います。

さて、本誌をもって最終号となります。ニュースレターは最終号ですが、COC事業は今後、神戸大学を中心としたCOC+事業として2019年度まで続きます。地域のコミュニティケアの拠点として、本学がこれからも地域住民のみなさんと共に「健康づくり」に取り組んでいければと願っています。

COCコラボ教育ピックアップ ～健康生活支援学実習～

健康生活支援学実習は、2年生が住民(教育ボランティア)の生活の場に出向き、インタビューや地区探索をおこない、五感を通して地域に住む人々の暮らしの様子やその多様性を学びます。学生たちは、実習の2週間を通して、その地域の社会資源や住民同士の関係性、地域の課題など自分の住む地域よりも深く知ることになり、その地域や出会った方がより近い存在になってゆくようです。このように生活される様子を見せていただいたり、その方の考え方や人生史を聴かせていただくことは、家族以外の人との交流が少なくなっている現代の学生にとってとても貴重であり、人生の先輩としても多くのことを教えていただいています。次に控える病棟実習では、疾患だけに目を向けるのではなく、その人のこれまでの生活と退院後の生活をイメージしながら、その人らしさを大切にする病棟での看護へと学びをつなげてゆきます。

(神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター助教 小巻京子)